

過去への態度との関連からみた現在の自己の把握に関する一考察

横井優子

<問題>

私たちの自己は時間軸上に存在しており、それぞれが個々の過去の軌跡を描きながら生きている。

過去経験とその意味づけは、古くはフロイトの自由連想法に始まり現在に至るまで、心理学のさまざまな領域において重要なテーマであり続けてきた。また、近年は、Neisser (1988) の remembered self, Gergen & Gergen (1988) の self-narrative, Grene (1993) の historical self など自己の過去への拡張を強調した概念が提唱されている。だが、個人の過去経験の内容ではなく、過去への態度そのものに焦点づけた研究はまだ少ない。そこで、自分の過去への態度を調査することで、現在の自己の様相を捉える手がかりを得たい。

調査方法としては、日常の過去の想起様式を質問紙法によって検討する量的アプローチと、「自己は物語としての形をとる」(榎本, 1999; 2000) という自己物語の観点を取り入れた面接法による質的アプローチから過去の自己への態度を検討する。

<研究1>

【目的】 想起する時点の自己概念が過去経験の想起や意味づけを規定する一方、過去経験の想起によって自己概念が形成されるという側面もある。このように、過去の自己への態度と現在の自己評価との間には非常に緊密な関係があると考えられる。そこで、自分の過去への態度と現在の自己評価との関係について検討する。また、同様に過去の自己への態度と密接な関連があると考えられる時間的展望との関係についても検討する。

【方法】 1. 調査対象：国立大学生および短期大学生265人(男性54人/女性211人)

2. 調査時期：2000年5月

3. 調査内容：①過去への態度を測定項目(榎本・横井(2000)を改訂。14項目。4件法)、②過去評価得点・現在評価得点各1項目(過去の評価、現在の評価を0~100点の範囲で数値化するよう求めたもの)、③未来への方向性を示す3つの矢印(上昇・水平・下降)の選択課題(榎本, 2000)、④多面的自己評価尺度(榎本(1999)の多面的自己評価尺度の短縮版。30項目。7件法。「知性」、「創造性」、「情緒安定性」、「積極性」、「信頼性」、「外見的魅力」、「身体能力」、「対人関係」、「誠実性」、「家族」、「物質」、「交渉能力」、「社交性」、「実存」の14側面の下位尺度からなる)、⑤時間的展望尺度(白井,

1991。19項目。5件法)

【結果と考察】 <自己評価> 過去の拒否 自分の過去に否定的なほど、自らを情緒安定的でないと思ったり、誠実でないと思ったり傾向があった。また、「人生史の中に書き換えたい過去があるかどうか」は、自己評価14側面中もっとも多くの側面と関係があった。

過去の開示 自分の交渉能力、対人関係、社交性という外交的側面や、家族・血縁、身体能力という基本的属性の自己評価が高いほど、自分の過去を開示する傾向があった。

過去の受容 過去の受容は自己評価ともっとも強く関係しており、自分の過去に受容的であるほど自己評価は高かった。

過去への固着 過去への固着があるほど、わずかだが自己評価が高い傾向にあった。また、現在の充実感のなさや、対人関係のつまづき、誠実さがいないことが過去へのとらわれを生んでいることが示唆された。さらに、過去への固着と社交性の高さの関連が示された。

<時間的展望> 自分の過去を受容し、過去をよく人に語り、過去のイメージが明るいほど、時間的展望が確立していた。一方、人生史の中に書き換えたい過去があり、このことを話すと嫌な気分になるという出来事があり、過去にとらわれ、消してしまいたい過去があり、過去に戻りたいと思う傾向がある人ほど、時間的展望が乏しかった。

<研究2>

【目的】 近年、現代青年の内省の乏しさが指摘されている。過去の自己への態度、つまり過去の自己について考えることは内省の一部とみなせよう。また、内省と対人恐怖の心性との間に関連があることが示されていることから(岡田, 1993)、過去の自己についての態度と対人恐怖の心性との間に関連があることが考えられる。そこで、過去への態度と対人恐怖の心性との関連について検討する。

【方法】 1. 調査対象：私立大学・短期大学生278名(男性56名/女性222名)

2. 調査時期：2001年5月~6月

3. 調査内容：①過去への態度の測定項目(榎本・横井(2000)を改訂。13項目。4件法)、②過去評価得点・現在評価得点、③過去と聞いてまずイメージする年齢、④一番懐かしい年齢、⑤戻れるものなら戻りたい年齢、⑥

未来への態度を測定する項目（榎本，2001。4件法），
⑦対人不安意識尺度林（林・小川，1981。7件法）

【結果と考察】 過去を受容し，明るい思い出が多いほど対人不安意識が低く，過去にとらわれ，よく後悔し，消したい過去や書き換えたい過去，思い出すと嫌な気分になる出来事があるほど対人不安意識が高かった。単に過去をよく思い出したり，過去に戻りたいと思うことも対人不安意識の高さと関連があった。ここから，過去への態度は対人不安意識のあり方とさまざまな形で密接に関係していると言えよう。

<研究3>

【目的】 Erikson (1950) は，アイデンティティの確立には過去の自己と現在の自己が時間的に連続した存在と認知されることが必要であるとしている。また，たとえば，基本的信頼感とは自己の時間的連続性と密接な関連があるという（谷，1996）。こうしたことから，アイデンティティの達成過程と個人がもつ過去の自己への態度との間には何らかの関連があると予想できる。そこで，青年期にある大学生の過去への態度が，Eriksonの唱えた各発達課題の達成度とどのような関連があるかを検討する。

【方法】 1. 調査対象：国立・私立大学生および短期大学生171人（男性78人／女性93人）

2. 調査時期：2001年10～11月

3. 質問紙の内容：①過去への態度の測定項目（榎本・横井（2000）を改訂。16項目。5件法），②自我同一性尺度（Rasmussen（1964）の宮下（1987）による日本版で，Eriksonの最初の6つの発達段階達成度を測定する。67項目。7件法），③多面的自己評価尺度（研究1と同じ）

【結果と考察】 過去への否定的感情 男性ではアイデンティティが確立されていないほど，女性では自発性や自律性が獲得されていないほど，過去への否定的感情が高かった。

過去の受容 男性ではアイデンティティが確立されているほど，女性では勤勉性が獲得されているほど，過去に肯定的であった。

過去への固着 男性では自発性が高く，自律性が低いほど，女性では，自律性や基本的信頼感が低く，親密性が高いほど，過去に固着している。

過去の開示 男性では親密性が高く，自律性が低いほど，女性では自律性が低いほど，過去を開示する傾向があった。

以上，各発達段階得点と過去の自己への態度との間に，さまざまな関連があることが確認され，とくに自律性得点やアイデンティティ確立得点との間に密接な関連

があることがわかった。

（紙面の都合上，結果の一部省略）

<研究4>

【目的】 研究1～研究3で，自分の過去を人によく語るかどうか自己評価や時間的展望，対人不安意識，発達課題の達成度と関連があることが示唆された。そこで，自分の過去について語る面接調査により，語りの中にあられた自分の過去への態度を，想起の内容や過去の意味づけを通して検討する。

【方法】 1. 面接対象：老人保健施設の入居者から40名を無作為に抽出したうちの3名

2. 面接時期：2000年2月

3. 面接手続き：居室（個室）に訪問し，対面式で面接をおこなう。面接時間は各約100分。聞き手が設定したいくつかの質問（「人生の転機」など）に対して，想起された内容を自由に語ってもらった。面接内容は承諾のもと，テープに録音され，聴取後に逐語録を作成した。逐語録の検討は，榎本（1999；2000）の自己物語の立場にもとづき意味づけされた。

【結果と考察】 3名によって語られた過去のエピソードの整理を通して，語り手が生きている物語の中心的文脈を抽出した（具体的な聴取内容はここでは省略）。語られたそれぞれのエピソードは，語り手の聴取時の感情や解釈，意味づけを伴ったものである。なかでも，人生の転機となったエピソードの現在における解釈，意味づけに注目することが，過去への態度を検討する際に重要であろう。また，自分の過去を意識的に振り返る場を作り，自分の過去を語ることは，現在の自己に新たな気づきをもたらし，さらに，現在の自己だけでなく，未来の自己像にも影響を与えると考えられる。

<今後の課題>

今後の課題として，第一に，過去への態度の発達心理学的な研究の必要性があげられる。今後はとくに，アイデンティティが再構築されるとされる中年期や，人生の統合される老年期における過去の自己への態度の調査を中心に進めていきたい。

第二に，自分の過去への態度を規定する個人差についての検討である。自己受容，自己開示，自己感情，自己知覚，自己複雑性など，自己に関連したさまざまなテーマや，動機づけや原因帰属との関連を検討したい。

第三に，過去の自己への態度の文化差の問題について，文化心理学的視点を取り入れた検討をしていきたい。

さらに，自分の過去への語りについての質的分析法の確立も今後の大きな課題である。